

## 築港の個性を尊重せよ

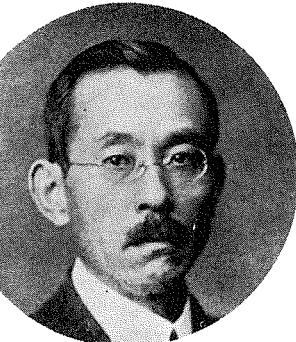
工學博士 直木倫太郎

港灣計畫は技術であると同時に一つの科學である。單一なる技術上の見地のみでその目的を達成するには、寧ろ餘りに錯綜した活社會上の問題が十重二十重に絡み合ふから、一問題の適切なる解決の爲にも其處に是非とも其の港の動きを總ゆる方面から研究探討して自ら一味の渾然たる綜合統整の妙趣を把握し發揮せねばならぬ。即ち其處に他の幾多の技術問題と比べて計畫上の最高の妙味を伴ひ、同時に又最大の苦心をも要するのである。

蓋し築港の目的は頗る單一である。言ふまでもなく、港内船舶碇繫の安全と貨物荷役設備の充實とに對つて最善の方法を講ずれば足りるのであるが、然も實際からすれば港の問題は各港悉く區々であつて、その必要の程度若くは緩急の大小は固より、その施設の手段方法に至つては即ち正しく千態萬様である。第一その港の地理地勢上の素質、その商工業上の活力、その輸出入貨物の品種並に出廻り鹽梅、次ではその港の經濟的勢力關係、進むでは隣接諸港との競合狀態等々、幾多の事實と事情から綜合打定し來つた處に初めてその港の持味即ち個性が窺ひ得らるゝのであつて、然る後にこそ初めてその港の必要そのもの、適切そのものを計畫すべきであり、斯くて初めて計畫そのものが活きるのである。

他の多くの技術は恐らく他の先例に倣ひ又は一定の規格を追ひ、又は敢て一步を他に先んじ、若くはこれを新にすることによつて、頗るその成效を誇り得るのであるが、築港の技術に至つてはこれを技術に誇らんよりは寧ろその必要の緊密さ如何に誇るべきである。事業の大觀小察これと併せて、更にこれを

施設の緩急順序に稽へ、一線一劃の徹して、悉くが全く抜差な



工學博士 直木倫太郎氏  
Dr. R. Naoki.

らぬ程度の緊密味を有することに於て、初めてその計畫の誤らざりしこ事が計畫者に取りての満足であり、次でその地の全市民の諒解にまで進むのである。

斯く言へば、如何にもたゞ眼前の必要と適切そのものとのみに對應した計畫をば謳歌するかの如くに聞かるゝ處があるが、それは本意ではない。施設は須く必要そのものであれ、計畫は無論將來の遠きに亘つて矛盾あらしむるなかれ、と斯く言ふこの當然さを誰が否定せう。たゞ最近私が若干の港灣計畫に参加し、又はその施設を見物した爲の痛切の感じとして、隨分土地によつては最初から法外な理想的乃至空想的な計畫が目論まれ、これが即ち築港、これが出來ねば即ち何時までも裸港と云つた風に、寧ろその土地の人達をして信ぜしめつゝあるが如き嫌ひもあるので、聊かそれに激して『適切そのもの』を説きたくなつた傾きもある。

佛蘭西の築港の大家キネット、ロシュモン卿は曰く『私はル・アーヴル港に技師たるこゝ十七年、その間私は港を常に作り且つ常に壞した』と。如何にも時代の進歩は敏活だ、時代に後れないが爲には、築港工事の如きは寧ろ運巧よりも拙速を尊むべきであらう。そ

れには勢ひ『必要そのもの』『適切そのもの』主義が或は最後の勝利を占むるこゝ、彼のル・アーヴル港の如くなるかも知れない。但し貧弱なる我國として、苟くも築港工事を起す以上、何の土地でもその計畫には飽迄長き將來を見通した大きな彈力性に富むだ所の『適切そのもの』主義でこそありたい。

一體『築港』と言ふ文字の響きがわるい。明治初年に政府が着手した彼の野蒜、三國の二築港が失敗に終つて以來、『築港』の文字には政府すらが寧ろ恐れを爲した。従つて船舶の増加、船型の改良、船體の擴大誰が目にもその著しきを加へ來つた今日に及むでも、まだ『築港』の響きが悪くて、今だに徳川氏時代

の港をそのまゝ、何の改善をだも遂げざる裸港が我國の至る所に横はつて居るが、『適切そのもの』本位の『港灣改良』くらひならば、それはさまでの困難なく、到る所の商工都市で市と縣との奮發次第で隨分出來さうなものではないか。またそれをしも出來し得ないで大正の今時にまで徳川時代の裸港をそのまゝでは、その市民の意氣も面白も邃に如何である。但し築港さへ出來れば、すぐ一足飛びにその都市が大發展を來すものかの如くに夢想し宣傳するに至つては、之れも亦厄介千萬であらうよ。築港は決して築港自體だけで以て萬能力を發揮し能ふものでないから。

### 趣味の燕洋博士

直木燕洋博士は復興局長官と云ふウルサイ役目を投げ出して博士本來の趣味生活に入り、目下神戸と東京で月半々位の生活をしてをられます。時々地方へ出かけては  
薰風や船して海を相しけり  
と其オリヂナリチーを發揮し、近頃は又佐々木信綱博士の門に入り短歌の創作を初められたさうです。

一度聽き度いと思つてゐた觀世流の謡曲は近頃サツバリやらないこの事、海港工事に關する説を叩くと、相變らず博士一流の論が出ます。

本論の題命は編輯部で勝手に作りました。博士の本意でないかも知れませんから御諒承願ひます。

